

幼稚園における視聴覚教育の考え方



樋口澄雄

一、まず考えておきたいこと

ラジオからテレビとマス・メジャが急速に発展するにつれ、視聴覚教育の論議もまたさかんである。

紙芝居が、街頭から学校教育の中にとり入れられようとする時も、この問題をめぐって教育界はちよつとしたざわぎがあった。しかし紙芝居の場合は、街に既成のものがあり、その中に好ましくないものがあったので、内容論が主となって論が展開された。

しかし、今日の時限で視聴覚教育が問題になるのは、そうした角度、すなわち一億総白痴化といったことばに代表されるような内容論もあるが、もっと基本的に、マス・コミの一部、とくに強い影響力をもっているラジオ、テレビの力をどう受けとめて、学校教育の中に位置づけるか、そうした学校教育とマス・コミという角度で問題になっている。その意味で、紙芝居、スライド、映画時代の視聴

覚教育と今日的段階という視聴覚教育とは、その問題の質がちがってきているように思う。

街の小さな企業でできる紙芝居やスライドの作品は、選択する学校側に大きな力があった。またその力によって、すなわち顧客によって作品傾向は決定されるといってよかった。しかし、ラジオ、テレビの場合

は、その企業形態がまったくちがう。受け手の声はそうかんたんに企劃を左右しない。ときたま受け手の調査などおこなって番組編成を考えるにしても、もっと奥には、送り手の企劃ががんじからめの中にくみ立てられているのである。いうなれば、権力が存在するのである。安直に批判に対して対応したプログラムや内容変更をするようなそんなまやかししいものではない。この質のちがいがいこそ、すなわち一方交通による放送内容であることこそ今日、私たちの関心事の最大のもでなければならぬ。

「内容は受け手が選択すればよい」といった甘っちょろい考え方に流されていると、とんでもない方向に持っていかれる心配がある。そこにマス・コミのおそろしきがある。

とくに最近のようにコマーションの放送がたくさん出るようになる、この点はこの点ほことさらに考えなければならぬ問題である。

ここでは、私は、こうした論に深入りする役目を持っていない。そこで、この前言は、次に視聴覚教材利用の立場にある私どもの共

通の心がまえとして、最初に考えの中に入れておきたいこととして申しのべたのである。次に、幼稚園においての視聴覚教材の利用についてどう考えたらいいか、具体的な問題についてのべてみたい。

二、幼児の発達と視聴覚教育

幼児の教育に役立つさまざまな教材を視聴覚を通しておこなう利点、欠点を幼児の発達程度に合わせて考えなおしてみることがあながち無駄でないように思う。とくに今日のように視聴覚教材がたくさん用意されている時代には必要が強かろうと思う。

内容のことは別として、「視聴による」教育手法の問題は大事な問題であるからである。

どだい、私は、幼児はできるだけ原始の形（方法、内容とも）のこのった教材で教え、学びとらせていくことが将来の成長の礎をつくるのに適していると思っている。彼らの成長の段階に合わせて、行動の波長に合わせて教育するということを考えるなら当然そう考えざるをえないからである。

しかし、一方、「現代」という時代の教育法として、また環境的に文化財の多くが彼らの周囲にはらんらんしていることを考える時、そうした手法だけを唯一の方法としてよいかまたそれが可能であるか、かりに可能であっても果たしてそれが現代的教育法であるか、そのことに問題を感じるのである。原始時代の人類の成長の段階を幼児にもふまえた方がより自然な教育であると考える一方、すでに現代はそうした教育法が不可能なまで社会環境が開けているという矛

盾がある。できるだけ短時間に発達の段階をおえていくことが能率的な教育であるというならば果たして、こうした矛盾をどのように解決していくか、このあたりに今日の幼児教育での視聴覚教育の問題がひそんでおり、視聴による教育の位置づけの根拠が考えられるのである。

要領よく結論づければ、「子どもの成長段階に応じて、現代的教育手法を適当にとりあげてやっていけばよい」ということになるかもしれない。しかし、こんな答は一文の価値もない抽象である。少なくとも現場は、こんなことでは解決しない。

ではそのことをどう考えて、どうしたらよいか。

原始人に相当する発達段階にある子どもは、自らのエネルギーを、対物すなわち物に対決して身体的経験で学んでいこうとする傾向と興味をもっている。空なる理論はきらいであるし理解もできない。道徳的行動でさえ経験的に学んでいく時代である。そのかわり、具体的には「在る物」に対して、「自己」をぶっつけていく活動には本然的といってよい程の興味をもっている。しかもそうした活動のくり返しによって、「ものやものごと」の本質を身体的に学びとっていく。すばらしいエネルギーを持っている。

こうした傾向と視聴による学習とはどう関連づくか。

視聴覚による教材は、大まかにいって抽象されたものである。少なくとも子どもにも具体的に感じとらせるためには、子どもの心を、その中の人物なり事象にじゅうぶんひたたりこませなければならぬ。絵をかき、工作をやり、歌をうたい、おどりを本命とする子どもに

とって、かかれた絵による紙芝居もスライドも、耳だけによるラジオも、画面と耳によるテレビでさえもそれ自体は抽象の世界である。

したがって、この抽象教材を具体化すること、すなわち子どもの中に心を動かすものにするための操作が、ゆうぶんにおこなわれなければ、視聴覚教材は、とうてい子どもものものになりえない。レクレーション的役割を果たす何ものかにはなるかもしれないが、教育の主座はおろか脇役にもなりえない宿命をおわなければならない。

対物関心と同等にまで引きあげる必要があるわけである。心の具体化をじゅうぶんにしなければならないのである。

そこで、すでにある視聴方式によるものについての方式論の上からそのことを少し考えてみたい。

三、幼児に適する視聴方法

以上の論からいって、幼児の視聴方式はできるだけ、素朴であることが好ましいことになる。たとえば紙芝居や人形芝居のように子どもが作れる限界内——絵画——人形——写真といったもの——ものをレファインしたものに近づきやすい心の親近感があるわけである。時間的にも手法的にも一見もたまたまするようにみえるこの種の方式が実は子ども心の発達に合っていると見えるのである。

これに比べてことばだけによるラジオは相当のむずかしさを持っている。音楽指導にはよいと思われるが、他の内容についてはかなりむずかしい面をもっている。童話でも話術によって補ったり内容の精選による外は方式からみれば幼児にはあまり適したものとはいえ

ないのである。ことばはそれ自体抽象されたものである上に、具体的人の影のないこの手法は、幼児の教育にとってある限度を示していると思つてさしつかえないと思う。

これに対して、テレビは、絵画の手法もつかえれば、人物を影響によつてみせることも可能なのでラジオに比べてみればずっと具体として子どもの心をとらえることができる方式である。抽象であることにはちがいがいくつかの抽象を組織している点ですぐれている。

しかしこれとても、オールマイティではない。というのは自己の身体的活動を伴わないからである。中には、子どもに作業または運動をさせるようにしむけての放送も試みられているが、所詮は放送である。受け手のその場にいる指導者によらなければ、作業も運動も可能でないからである。少なくとも教育的にはそういえる。

以上のことを結論的にいえばいろいろの方式のうち紙、人形芝居のように子ども自身の作業と近い手法とか、抽象的手法ではあるがいろいろの手法を組み入れたテレビなどは、一応幼児に合う手法ではないかと思つている。

いずれにしても、幼児の視聴覚教育は、その環境が視聴教材に囲繞されているにしても余り多くの時間をこれにさくべきではないと思つている。やはり、自発的、行動的、経験的な具体物による経験活動を重んじていくべきであらう。したがって視聴覚教育は幼児教育の補助的役割の域を永久に脱しえないと考えている。